

\*\*\*\*\*

## 非暴力の原則を語る

阿木 幸男

聞き手・古澤宣慶（編集委員）

\*\*\*\*\*

まえがき

―『非暴力』概念の混乱を憂う―

阿木さんと私は、七十二年に東京のクエーカーが開いた非暴力トレーニングセミナーで知り合いました。その後、阿木さんはフィラデルフィアのライフセンターで二年間、非暴力の生き方と実践について学びました。そのころ私は、日本で非暴力行動準備会を作り、ベ平連や解散後のベトナム反戦運動に関わりながら、非暴力の普及につとめました。

帰国した阿木さんは、精力的に世界をまわり、日本で非暴力トレーニングを行い、多くのNGO活動に関わりました。今は非暴力平和隊の発展に力を注いでいます。

30年前に比べて、今は「非暴力」と言う言葉が一般化し、『広辞苑』にも載るようになりました。そのこと自体は喜ばしいのですが、ガンジーやキングが実践した「非暴力」とは違う、それらを全く参照しないような「非暴力」観が表明されたりしています。

国家権力が「大きな暴力」であり、それへの対抗暴力は「小さな暴力」であって「非暴

力」である、という見解は昔からのものです。最近、三里塚闘争での管制塔占拠は物を壊しただけで人を傷つけたわけではないから「非暴力」だとの意見が出されています。

フランツ・ファノンがアルジェリアの植民地解放闘争で、武装と暴力を肯定しました。そのことに関して、暴力・非暴力の二元論で判断をしてはならないと、本橋哲也氏は言います。（『ポストコロニアリズム』岩波新書）イスラエルの兵に向かって石を投げた、パレスチナの子どもたちの行動を、「非暴力でない」と言うだけです。それができるかどうか、私自身にも迷いがあります。

話をかえて、「九条実現」の意見広告ですが、今年『読売新聞』に載せて大成功でした。「九条実現」とは文字通り、日本国憲法第九条に明記された「非戦・非武装」の規定を現実のものとする事です。そのことのために活動することです。そこで九条の理念にもっともかなうのが、「暴力を用いない」という非暴力の方法です。そのためにこそ非暴力の原則を明らかにし、内実を確かなものにしておかなければなりません。

そこでまず阿木さんに、徹底した非暴力の

原則と理念を語っていただきたいと思います。これをもとに、大いに議論が盛り上がることを期待します。

（ふるさわ・せんけい 編集委員）

## 途上にある非暴力

非暴力の原則をということで、私が非暴力トレーニングに興味をもって関わるようになったいきさつから話をしたいと思います。

七十二年、日本で初めての非暴力トレーニングセミナーが、アメリカから二人のトレーナーを招いて開かれました。六泊七日の合宿でした。その後、アメリカのフィラデルフィアに行きました。

非暴力トレーニングが出て来た背景には、アメリカ社会の暴力、それからベトナム戦争がありました。六〇年代にベトナム戦争に反対した時、日本も同じでしたが、市民や学生が石を投げたり物を壊したりし、また、多くの逮捕者が出ました。その時に、特にクエーカー教徒の絶対非戦主義の人たちの中から、平和で非暴力的な社会を作るためには、運動者自身が非暴力で平和的、民主的であればならない、という声が出てきました。そして、この原則を実践の場で生かすためには非暴力トレーニングが必要ではないかと、週末や夏、冬に三泊四日、長い場

合いを積み重ねることが、運動を非暴力化して行く鍵です。

### あるアフリカ人の話

今年の七月、タイで約二週間の国際的な非暴力トレーニングセミナーが開かれ、私は日本の代表として参加しました。アフリカ、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、アジア、北アメリカから二十三名が参加しました。それぞれに反核、反軍、人種差別反対等の運動に関わっている人たちです。

トレーナーはアメリカ人二名、フィリピン人一名、タイ人一名でした。

ジェンダーすなわち男女の社会的役割についてのセッションで、あるアフリカの人から次のような意見が出ました。

アフリカでは基本的な人権すら守られていない。非暴力的にデモや集会をしても逮捕されてしまう。これは男か女か、若いか年をとっているかに関わりなく、反抗すれば暴力を振るわれ、逮捕される。そういう状況では、男であるとか女であるとかについてさほどの意識はない。同じ人間として、仲間として運動に参加している。絶対的な暴力、権力に対してどう立ち向かうのか、多くの若者を集めるかということの方が大切だ。だから、ジェンダーということに関してはそれほど重きをおいていない、と。

欧米の非暴力トレーニングは、「ジェンダー・セクション」は重要かも知れないが、アフリカの一部の状況においては特に重要とは言えない。そういうところに意識のズレを感じる。大切なのは、人間として生きて行くためには何が本当に必要かを考えることではないか？

そう考えると、大切なのは「スピリチュアリティ(精神的なもの)」ではないか。クリスチャン、ムスリム、どの宗教でも「精神的なもの」をもっている。そういうものが、運動をする上で大事だと思う。

ところが、欧米の非暴力運動の人たちは、あまりスピリチュアリティを重視しているとは思えない。実際にはクエーカー、プロテスタント、カトリック、仏教の人たちがいるのだけれども、運動の中で精神性とか宗教性とかについて話すことをタブーにし、避けている感じさえする。アフリカ人の立場からすると、宗教的、精神的なものがあるこそ、自分たちの望む社会を実現する方向に向かって行けるのではと思えるのに。

非暴力トレーニングは、とても役立つことではあるが、技術とかやり方・方法だけを習うというのは、ちよつと違うのではないか。技術、やり方・方法というのは、それを使う者の精神、こういう社会を作りたいという心があって初めて

生かされると思う。

私たちは、軍隊や武器は一切ない方が良く考える。しかし、欧米のNGOの中には、自衛は必要だと考えている人もいるし、ある程度の軍隊は必要だと考える者もいる。それは危険な考えのような気がする。軍隊とかの力を持てば、対抗して力を強くしなければならぬという動きが出てくる。しかし、本当に、軍隊や武器を持つ必要があるのだろうか？

今の国際社会は、超大国が巨大な軍力を有し、ほとんどの先進国が軍隊を持つていて、武装することが当たり前のようになってきている。そのことによって、アフリカやラテン・アメリカ、第三世界の国々の人たちが人間らしく生き、生活するための環境を奪ってしまっている。軍備は貧困を助長するだけだ。軍隊がなければ平和を維持できない、という考え方が根本的に間違っているのではないか。

私自身、軍隊とか武力とかいったものは、本来は必要ないものだと思います。人類の最大課題は、この問題をどう克服するかだと思います。日本の軍事費は、①国家予算がだいたい六・三%で、世界第三位で四四四億ドル。②アメリカは世界第一位の軍事費で二九四六億ドル、世界全体の軍事費の四〇%になります。そういうお金を平和建設や社会福祉に用いれば、多くの人たちが人間らしい、豊かな

合は一週間の非暴力トレーニングを行なっていました。自分たちの行動、活動の基本方針を検証し、より多くの人たちが参加できる非暴力の方法・手段を生み出す必要がある、という反省がありました。

トレーニングそのものは、歴史的にはヘンリー・デビッド・ソロー、『森の生活』を書いて軍事費を拒否し軍隊に反抗した人がいます。そして、マハトマ・ガンジー、キング牧師。彼らは一貫して非暴力を唱え、社会の不正義や暴力に立ち向かいました。しかし、非暴力手段を用いた運動で、目標と掲げた社会が実現されたことはありません。非暴力運動は常に途上にあるものだ、と私は思います。

### 非暴力に徹する

人間自身暴力的な側面を持っているので、内なる暴力に目を向ける必要があります。そして、行動そのものを非暴力とするためには話し合いが大切です。お互いが十分に話し合い、多くの人たちが納得できるような形が必要です。民主的な採決方法だとされる多数決は、数の多い方が勝つというある意味での合理性を有していますが、少数者の意見を無視することにもなります。そこで非暴力運動では、コンセンサス（全会一致）の方法をとるようになりました。全員が完全に同じ意見にならなくとも、ほぼ同意でき

るまで徹底的に話し合うということです。少数者の意見を軽んじない、無視しない、ということとは本当に大切です。

最近の日本、それから各地の運動では、「非暴力」を口にする人たちが多くなってきました。しかし、実際の行動の中で、特にデモとか集会において警察官に罵声を浴びせたり、物を投げたり壊したりする人もいます。

さらに、こういう考え方を持っている人がいます。大きな暴力に立ち向かって振るう市民の側の小さな暴力は許される、という考え方です。私はこれに反対です。

運動に関わる人たちは、自分たちが望む社会のありようを象徴するような行動をとらなければなりません。一見「敵」だと思われる人たちに対しても、忍耐強く話しかけて、その人たちの内心が変わるように働きかける必要があります。例えば、警察官も機動隊員も職業としての任務を果たしているのに過ぎないのであって、根本は私たちと同じ一人の人間です。その一人の人間の良心に働きかけて行くことが重要です。

例えば、イスラエルの兵士に向かって、パレスチナの子どもたちが石を投げることに。ある人は「非暴力ではない」と言います。また、ある人は「絶対的な力をもったイスラエルに対して石をなげることは許される、精一杯の抗議の意思表示な

のだから」と。

イスラエル・パレスチナ問題は歴史的に古く、両者が互いに暴力を振るい、殺し合ってきました。その解決は容易ではありませんが、パレスチナの人々が平和で民主的な社会を望むのであれば、運動の質をそういつた社会にふさわしいものに変えて行かなくてはならないのでは、と考えます。

石を投げるといふ行為によって何かが根本的に変わるとは、私には思えません。私は別に、石を投げる子どもたちを責めているわけではありません。石を投げざるを得ない心持ち、また立場というものがありません。大切なのは、子どもたちが石を投げなくてもすむ状況を作るにはどうしたら良いのか、大人たちが真剣に考えることではないでしょうか。

日本での運動も、非暴力に徹するためには、日ごろからの議論や話し合いが大切です。「非暴力とは何か」あるいは「暴力とは何か」といったことを真剣に考え、議論し、望ましいあり方についてみんなで検討して行くことが重要です。

市民運動自体がそうですが、非暴力はさらに、一人一人のメンバーがそれぞれにリーダーたる自覚をもつて、自らの役割を認識し、助け合って運動を作る、そのための民主的なプロセスを徹底して貫こうと努力することです。日常的に話し

な生活を送ることが出来ず。私たちがすべきことは、そういう方向に向かうよう、国の指導者や政府に働きかけることです。

### 非暴力平和隊

私が関わっていることの一つに、NGOの非暴力平和隊があります。これは今、スリランカのタミール派とシンハラ派の間で約二十年続いた紛争を非暴力的に解決するために、国際チームを現地に派遣しています。これはもともと、ハーグでのNGOの平和アピールという国際会議をきっかけに生まれたもので、国際的な平和活動を非暴力的に行なうという団体です。敵対し、戦闘状態にある両者の間に入って、話し合いのテーブルにつくことができるような基盤を作ることが役割です。

民間レベルで三十人から四十人という規模でやっています。これからは国と国とが戦うというよりも、一国内の異なる民族が争い、それが長期化する問題が多くなると思います。その解決には、国際的な世論が盛り上がり、関心が高まる必要があります。非暴力平和隊は、あくまでも中立的な立場を守りながら、話し合いの場を確保するために活動することを目指しています。これは、いずれは国連が担うべき仕事だと思えます。しかし、

国連がアメリカに支配されたり、戦争を起こすための決議をしたり、パワー・ポリテックスに巻き込まれているという現状があります。そういう中では、民間レベルでの非暴力平和隊のような活動は、きわめて重要ではないかと思えます。

最後に九条に関することを述べます。安倍政権になって憲法「改正」への動きが活発になり、北朝鮮の核実験を契機にして「周辺事態」への具体的対応が論議されるようになりました。アジアで何事かが起こったら、自衛隊を派遣すべきだとの声が高まっています。しかし、本当に必要なことは、中国、韓国、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）、台湾、ロシアといった近隣諸国との関係を友好的なものにすることです。軍事力で抑えるとか、自衛隊を派遣するとかいうことではありません。日本がすべきことは、徹底的に話し合いを求め続けることです。

軍事行動を絶対にとらず、あくまでも話し合いに徹するべきだ、という議論がもつと湧き起こって欲しいと思います。平和憲法のあり方も時代と共に変わってきているわけですが、戦争はしない、軍事行動に参加しないという原則は不変で、日本国はその原則を絶対を守るべきです。そして私たちは、自衛隊そのものを縮小・解体する方向を明示し、武器を捨てた自衛隊の平和的有効利用を追求すべき

です。日本が非武装を実現すれば、少なくともその方向を明示すれば、周辺の国々は「日本は一切攻撃する考えがないんだ」と認識するでしょう。「積極的に平和」をかかげる日本の評価は高まり、そのような国をあえて攻撃するような国は出てこないだろうと、私は信じています。

（あき・ゆきお 成蹊大学講師、非暴力平和隊理事）

非暴力平和隊・日本（NJP）

〒113・0001 東京都文京区白

山1・31・9 小林ビル3F

TEL 080・5520・3077

FAX 03・5684・5870

<http://www5biglobe.jp/~njp/>

【参考】 本誌68号（〇一年十月）に大畑豊氏「国際非暴力平和隊創設にむけて」が掲載されており、非暴力・直接行動・中立の立場からの手法が述べられています。ぜひお読み下さい。例えば、スリランカでは非武装のボディガードとして生命の安全が脅かされている人に同行し、「中立の立場で護衛していた外国人が（誤って）殺されたなら一挙に国際問題化し、武装集団側もそれを望まず、暗殺を断念すると考えられます」と述べ、自身の命を賭けて活動する姿が語られています。これを「護衛的同行」と言います。

（編集部）